# 1

一九九六年九月十二日。

あとあとになってからも、塚田真一は、その日の朝の自分の行動を、隅から隅まできちんと思い出すことができた。そのとき何を考えていたか、寝起きの気分がどんなだったか、いつもの散歩道で何を見かけたか、誰とすれ違ったか、公園の花壇にどんな花が咲いていたかという些細なことまでをも。

そういう、すべてを事細かに頭に焼き付けておくという習慣を、ここ一年ほどのあいだに、彼は深く身に付けてしまっていた。日々の一瞬一瞬を、写真に撮るようにして詳細に記憶しておく。会話の端々までも、風景の一切れさえも逃さず、頭と心のなかに保存しておく。なぜなら、それらはいつ、どこで、誰によって破壊され取り上げられてしまうかわからないほど脆いものだから、しっかりと捕まえておかなければいけないのだ。

だからその朝、彼が二階の自室から階段をおりてゆくと、途中で新聞受けがカタリと鳴ったことを覚えている。いつもよりちょっと遅めだなと思って、階段の曲がり角の壁にある明かり取りの窓から外をのぞくと、灰色のTシャツの袖をまくり、スクーターにまたがった小太りの新聞配達員が、ちょうど目の下を通り過ぎてゆくところだった。彼のTシャツの背中





には、浦和レッズのチームマークとマスコットがプリントされていた。

玄関のドアチェーンをはずしていると、彼の気配を聞きつけたロッキーが前庭で吠え始めた。鎖をジャラジャラ鳴らして喜んでいる。真一がドアを開けると、鎖の長さの許す範囲内で懸命に伸びあがり、喜びを身体いっぱいに表して飛びついてこようとした。そのとき真一は、ロッキーの腹の毛の一部が妙に薄くなっていて、皮膚が透けて見えていることに気づき、怪我でもしたかなと思った。なんとかロッキーを捕まえて押さえつけ、もっとよく見ようとしたのだけれど、散歩に連れていってもらえる嬉しさにはね回っている時のロッキーは、とても真一の手に負えるものではなかった。仕方がない、散歩から帰ってきたらおじさんにも見せて、なんなら獣医へ連れていかなくちゃと思いながら、ロッキーをつないでいる鎖を、庭の一角に立ててある杭から外した。そのときに、昨夜降った雨の名残で、鎖が湿っぽかったことをよく覚えている。手のなかでひんやりと重く感じられたことも。

ロッキーはこの石井家に、真一よりも半年ほど前から住み着いていた。今は遊びたい盛り、いたずら盛りで、いつも元気を持て余している。ぬいぐるみみたいに毛並みのきれいなコリー犬なのだが、真一が石井夫妻から聞いた話では、純血種ではないそうだった。そう言われてよく見ると、コリー犬にしては少しばかり鼻が短くて、胴体も寸詰まりの感じがするけれど、それがかえって愛嬌があって良かった。

真一の方は、石井家に住むようになって、そろそろ十ヵ月になる。朝晩ロッキーを散歩に

連れ出すことは、今ではすっかり彼の仕事となっていた。石井夫妻は、もともとそれほど犬好きというわけではないらしく、ロッキーの散歩は、夫妻にとって、ずっと気億劫（きおっくう）な仕事であったようだ。実際、真一は時々、おばさんは本当はロッキーみたいな大きな犬が怖いんじゃないかなと感じることもある。だから、ロッキーが真一になつき、真一もロッキーの世話を楽しむようになると、ふたりとも口々に、大いに助かると言った。

それならばなぜ、ロッキーを飼ったのだろう？　世話をするのが大変だったのならば、どうして？　真一は、その質問を、幾度か喉元までのぼらせては呑み込んできた。尋ねれば答えてくれるだろうけれど、きっと気まずい雰囲気になってしまうだろうことが、容易に想像できるからだ。

ええとね、あの犬にはちょっと可哀想な事情があってね、だから――と、夫妻は話す。そうなのだ、石井夫妻は、気の毒なものを放っておくことのできない性分なのだから。そして真一は頷く。そうか、ロッキーには、ほかに引き取り手がなかったんですね、と。そして心のなかで思う。僕と同じだ、と。石井夫妻はそんな真一の顔を見ていて、今君がロッキーは僕と同じだと思ったことを我々は知っているよという顔をする。夫妻がそれを知っていることを真一も知っている。そして皆で知らんぷりをするのだ。

首輪から鎖をはずし、散歩用の革ひもに付け替えて、真一はロッキーを街路に出した。ロッキーは元気よく真一を引っ張り始めた。散歩のコースは決めてあるのに、この犬ときたら毎





朝違う方向へ行きたがる。それも、アスファルトに覆われていない場所へ入ってゆくのが大好きなのだ。きっと、土の感触が足の裏に心地よいのだろう。真一も時には、ロッキーの気の向くままに任せて引っ張られてゆくのだが、今朝はそうもいかなかった。昨夜の雨のおかげで、あちこちに水たまりができている。舗装してある道を選んで歩いた方が無難に思えた。で、ロッキーを引っ張り返し、いつものコースへと足を向けた。

細い路地を抜け、明治通りへ出る。早朝のことで、さすがに車の交通量も少ないが、その分、どの車もスピードを出して飛ばしている。歩道に出た真一たちの胸元をかすめるように通過していったタクシーに、抗議するようにロッキーが吠えた。

明治通りを西に向かい、白髭橋（しらひげばし）東の交差点を渡って、大川公園へと進んでゆく。すっかり秋めいて夜明けの遅くなったこのごろでは、ちょうどこのあたりへさしかかったところで背後から朝日が昇り、右手に見える高層団地群の窓ガラスに光が反射してきらめき始める。

先へ行きたがるロッキーを制して立ち止まり、真一は、昇りつつある太陽を振り向いた。昔の真一を知っている友達ならば、彼が今、毎日朝日を拝んでいるなどと聞いたら、ひっくり返るほど驚くことだろう。以前は、大多数の高校生と同じく、真一も夜型の若者だった。朝、決められた時刻に起きるのが苦手で仕方がなかった。学校の授業が午前十時ぐらいから始まってくれればいいのにと思うクチだった。

それが今では、すっかり変わった。自分でそのことに気づいたのは、石井家に世話になる

ようになってからのことだ。いつの間にかオレって、めちゃくちゃ早起きして、朝日が昇ってくるのを眺めるようになってた――と。

なぜなのだろうかと、自問自答してみたことがある。明確な答は、まだ出てこない。つまり、筋道立った理論的な答は。ただ、気分的には、自分で自分の行動の意味を理解しているつもりだった。

確かめたいのだ。また一日が始まることを。毎日、毎朝、自分が生きている――いや、昨日一日を生き延びて、今日という日を迎えることができたということを。まだ自分の人生は終わっていないということを。この先に控えているのは何ともしれない新しい一日ではあるけれど、とりあえず昨日は過ぎ去った、昨日という日を、自分は無事に生き終えた、と。そうしないと、生きている実感がわいてこないのだ。ちょうど、どこまで行っても風景の変わらぬ広大な砂漠を歩く探検家が、時々振り向いて足跡を確かめてみないと、自分が進んでいるのか停まっているのかわからなくなってしまうのと同じように。

それでも時々、こうして朝日を仰いでいてさえも、本当はオレはもう死んでるんじゃないか、死体の上を、ただ太陽が行ったり来たりしてるだけなんじゃないかという、空しい気分に陥ることもあった。

立ち止まったまま朝日に目を細めていると、傍らでロッキーがわんと吠えた。振り向くと、大川公園の方からジョギング・スーツを着た女性が走って近づいてくるところだった。





この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。